

山の神古墳の研究：「雄略朝」期前後における地域 社会と人制に関する考古学的研究：北部九州を中心 に

辻田，淳一郎
九州大学大学院人文科学研究院：准教授：日本考古学

<https://hdl.handle.net/2324/1515740>

出版情報：2015-03-23. Department of History, Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

序

1933（昭和8）年、二瀬（山の神）神社の社殿建設に伴う整地作業の際に石室が露出し、遺物が出土した。これが福岡県飯塚市山の神古墳の発見の経緯である。当時、九州帝国大学法文学部の国史学教室の副手であった鏡山猛は、現地に赴き緊急の調査を行うとともにそれらの遺物を大学に持ち帰り、国史学教室の資料室に保管していた。その後、1958（昭和33）年に九州大学文学部に考古学研究室が創設されるに至り、山の神古墳の資料は考古学研究室の代表的な所蔵資料となっている。それらは、画文帯環状乳神獣鏡などの鏡、衝角付冑や小札甲などの武具とともに、f字形鏡板付轡・剣菱形杏葉などの馬具、武器、農工具、装身具などである。特に、馬具は『日本馬具大鑑1 古代上』（日本馬具大鑑編集委員会編、1992年、吉川弘文館）などで写真が掲載されるなど、学界において貴重な古墳時代資料として注目されていた。ところが、発見後これまで80年間あまり、発掘報告書の刊行などの資料の公開がなされていなかった。

ここに、九州大学大学院人文科学研究院の辻田淳一郎准教授をはじめとする九州を中心とした中堅・若手の古墳研究者が集い、共同研究という形で遺物調査がなされ、発掘報告書が刊行されることとなった。併せて、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「「雄略朝」期前後における地域社会と人制に関する考古学的研究：北部九州を中心に」によって、福岡県桂川町王塚古墳に隣接する金比羅山古墳の墳丘調査が行われている。本報告書により、遠賀川流域の古墳時代中期後葉の基準資料である山の神古墳の全貌が明らかにされるとともに、この時代の地方首長の実態やヤマトとの関係が明らかになったものと思われる。資料整理にあたられた古墳研究者の方々、さらに九州大学大学院比較社会文化学府大学院生・人文科学府大学院生、文学部学生の諸氏の努力に感謝するとともに、80年の年月を経てようやく発掘報告書が刊行されることを喜ぶたい。

九州大学考古学研究室では、今後、王塚古墳を含んだ寿命の古墳群において、金比羅山古墳や天神山古墳の継起的な調査を進め、この地域の古墳文化研究の進展に寄与したいと考えている。

2015年1月19日

九州大学大学院人文科学研究院
宮本 一夫

例言

1. 本書は、2011～2014（平成23～26）年度に科学研究費補助金（基盤研究（B））「「雄略朝」期前後における地域社会と人制に関する考古学的研究：北部九州を中心に」（課題番号：23320171，研究代表者：辻田淳一郎）の交付を受けて実施した共同研究の成果報告書である。
2. 本書の執筆分担は目次・本文冒頭に記している。挿図・表は執筆分担者による作成が基本であるが、それ以外のものについては各項目ごとに出典を記している。
3. 山の神古墳出土遺物の図版写真は、刀剣類の集合写真と馬具の集合・個別写真、小札甲の復元写真を九州歴史資料館の北岡伸一氏に撮影していただいた。各遺物のX線CT画像については、九州歴史資料館の加藤和歳氏・小林啓氏に作成・提供していただいた（武具の一部は九州国立博物館の分析・提供）。各遺物の個別写真については各執筆者と辻田が撮影した。金比羅山古墳（第3章）の遺構と遺物は辻田が撮影した。
4. 鏡の三次元図については、九州国立博物館より提供を受けた。
5. 第2章第1節所収図のうち、鏡山猛氏資料については九州大学総合研究博物館の、梅原末治氏資料については財団法人東洋文庫の所蔵である。
6. 遺物の実測と製図については、各執筆者と九州大学学生（第1章参照）が行った。また第3章の金比羅山古墳の墳丘測量図・遺構図については、九州大学学生が製図を行った。
7. 山の神古墳（第2章第1節）の地形図上の方位は磁北、金比羅山古墳（第3章）の測量図・遺構図については世界測地系による国土座標に依拠している。
8. 「山の神古墳」の名称については、従来別の表記も行われているが、今回の報告書では「山の神古墳」の名称で統一した。詳細については第2章第1節を御参照願いたい。
9. 本書の編集は共同研究参加者の助言・協力を得て辻田が行った。